

脩身口授

漢加斯底爾譯

全

館	175	
	4	
	146	
冊	號	架

第七百	
全	一冊
K110.1	
53	

B

1

167-1



明治八年七月

脩身口授

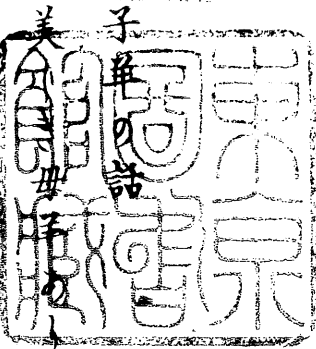
文部省

脩身口授之證

小學脩身口授

漢加斯底爾 譯

那珂通高 訂



昔白く美^{子羊}草を食ひ居たり、子羊ハ、母の傍ニ遊び居けるが、
遙ニ大木を見て、其邊ニ走り行くと、母ハこれを
喚び返せども、子羊ハ、歸ル心なく、愈遠く放れ行
まけるニ、^下林の中より、偷兒出來りて、直ニこれ
を攫み去れり、母ハ益鳴き叫べども、子羊ハ、再、其

小學脩身口授

文部省

の聲をきく、聞くこと能はざるに至り、嗚呼、母も子も皆愁む可きことならびや、若子羊としく智あちしめば、初より母の側を離れざらま、縦令一回離るゝども、其の呼ぶ聲は従ひ、速に歸りまば、かゝる偷兒の手は陥るまじきを、

果子の話

ガストンと云ふ稚き者あり、一日其の妹のロレンと、榻の上より美しき果子宮を、を見て、是に向に、祖母の遺し置きたる宮をらん、此中へはいりたる物あり、汝はこれを見ることを願ふべや、

と云ふ、妹も開きて見んと、いへば、ガストン其の宮の蓋を取り、て、是の圓き果子を、食ひて見んと云ふ、妹はこれを留めて、必祖母と叱られんと云ふを、ガストンは只一食ひて見んと、これを食ふ、味甚苦かりけまば、此の果子は味旨か



らざと云ひより、汝等こそを知る、彼の「ガス
ト」へ、其の筈は欺かまたるのみ、是は果子は
ららびいて、丸薬なり

人漸貪吝となり事

衆多の小童、相集りて物語を、其の中一人の云は
「は、余は羽子の遊を好み、昨日も繩を
借りて樂まんと思へども、昨日も繩を
其の上を踏え、だゝ、吝みて借さねほどの者をなれ
遊ぶものあり、だゝ、吝みて借さねほどの者をなれ
ば、彼の必貸をきくといへば、ギコスターと云
ふ者、傍より實は然り、彼の未人、物を貸したる

ことあらず、先頃も、我は一の竹馬を見せて、是は
木曜日、人より貰ひたりと云ひ、甚珍き
製りうゝゆゑ、一時間、予は貸して騎らせよと、請
ひしかども、彼肯らずして、其の儘秘り置けり
云へば、又「ヨシ」といふ者、彼は毎は、遊具を人
貸せば、何時も毀はさるゝゆゑ、我は決して貸し
たることなると云へり、然らば、遊具は何の益は
立つべきぞ、獨のみ遊びて、何の樂しきことあら
ん、故は余は、彼の心を善しと思ひ、ざるをり
云ふ、満座の小童、諸共、尤きりと答へり、余

作者自 實又、其の言を然りとす、幼時より、己一人の爲のみもる者、年長くるに及びても、此の惡習止まぐして、竟又、貪吝の人となるものなり。

不謹慎なる兒童

「マリ」と云ふ小娘あり、兄を「ハンリ」と云ふ、其佳き別莊に住り、其の莊外の小河に、板橋を架きたり、其の母常々兄弟を誡めて、汝等園中を遊歩して、必橋の上より到るべからば、若誤らば、水中に陥るべき故、決して予が言を忘るること

勿れと云へり、他日「ハンリ」母の誡を忘きて、橋の上より遊ぐんとするを、妹に止め、母の教へりくる言あれば、行き給ふを、と云ふ、ハンリは、其の性傲慢なる者ゆゑ、妹の諫を聽かずして、獨橋の上を遊びつゝ、「マリ」は、此處は甚面白く、水面平らして、影を照ること、鏡よりも明なりといひ、興に乗じ、全身を照さんとて、身を傾け、まが、誤りて、忽水に陥りぬ、マリは、大に驚き、高聲、人の援を求むるに、幸此處を過ぐる人ありて、「ハンリ」を、拯ひ出だし、衣服の濡れしを、

母の處に伴は行き、若此の時、此處を過ぐる人なかりせむ、ハンリットの必死を免れ得ず、其の母及妹は歎きをかくる、何如許をらん、汝等、苟親と師との誠あるとき、深く顧みむらるべからず、是余の汝等が危難は罹らんことを恐れて、時々制する所なり、されば能く慎みて必忘るゝこと勿し。

争鬪

「ポールの、是は余の紙馬なり」と云ひ、「オーギュストは、否然らば、是も余のものなり、汝放さざるかと、



互に罵り、此の彼の髪を攫ひ、彼の此の脚を握り、各力を極めて、一ツの紙馬を争ふ中、髪は亂れて、面は蒙り、紙馬の中より割と破れて、二人共は左右に仆れ、後には在り、小兒は衝き抵りて、傷つくほど、痛め、うへへ破き、馬は、遂は誰の物

ともならずざりま

矜傲なる少年

「マルセル」といふものの、麗しき少年をれども、謾
又大言して、何事をも、知り顔もてなり、僅又、歴
史を習ひ、文字を學び得れば、直又、それを人日誇
れり、其の母時として、これを誠むることあれば、
其の教を拒みて、我もよく、これを知らざりとい
ひへり、汝等、必「マルセル」を友とせること勿れ、汝
等ハ物を識ること多からざれども、彼ハ、汝等よ
りも、更ハ物を知らざり者ぞ、されば、其の所作、實

又笑ふべきこと多し、汝等、決してこれ又傲ふこ
と勿れ

欺言を好む牧夫

「ミシエル」と云ふ牧夫あり、常又心を盡して、衆多
の羊を牧せるが、其の場ハ山林又近くして、狼多
き所なりし、又「ミシエル」ハ、性質惡しき者ともあ
らび、又情ることとも、無けまども、毎又、種々の詐を
構へて、人を欺き笑ふことを、戯とも、癖ありき、
一日、常の如く牧場ハ在りしが、徒然をり多れば、
又例の癖發りて、忽大聲、狼出でたり、狼出で

りと叫び、故其の邊に居合せ、牧夫等、これを聞き、急に一足の犬を率ゐて馳せ來り、これを接ちんとせり、狼みえざり、然れ、憫れて、立居るを、ミシエルに見て、犬は笑ひ、余こそ即狼なれと云ふ、牧夫等、初めて欺られ、ることを知り、皆怒りて歸り去り、ミシエルは、これを見て、欺き得ると欣び居り、汝等も、善く誠めよ、戯れ、人を欺く、甚惡しきことぞ、假し、詐を言はば、人皆これを疑ひて、終りの禍は、懼るに至らん、この牧夫の如きも、果して、怒報を受けり、其の

後、牧夫又例の如く、羊を牧し居り、又、此度の、眞又狼出で來りて、衆多の羊の中より、最美しき羊を取らんとせり、ゆゑ、狗を嚇して、これを防がぬ、己も自噬に合へる狗を接けて、狼を打ち退け、羊を免れしめんとすれども、一人の力の及ぶ所は、あつざれば、又急は呼びて、狼出でたり、狼出でたりと、云ひ、かども、他の牧夫等、又例の詐よとて、各自、其の羊を牧し、顧る者なき中、犬は、竟、狼を噬み殺され、羊をも奪ひ去られり、是より、牧夫大に悔ひて、懲り、恐み、敢て人を欺うぞ

りーとぞ、是ハ常ニ詐を言ハバ、偶實を説くと雖、
人又信ぜられざることを初めて悟り得られバ
をり、

清潔

温厚よりて、勉勵を童兒あり、余深くこれを愛
むと雖、其の兒又余が大ニ惡む一癖有りて、抱
くことを得ば、是其の不潔なる故なり、この兒常
ニ手ハ墨又穢れ、衣ハ垢又汚れ、手簿を破り、書籍
を損ト、時ありてハ顔も頸も垢つき、髪ハ
散り亂れ、其の醜きこと、實に視るニ勝ヘバ、余ハ

此の兒若能く己の穢き
ことハ、母の愁ふる所を
るを知らバ、終ニハ自改
むることあらんかと、
思ふるなり、

食を貪る少年

汝輩小童、善く余が言を
聴け、誰モ卵糖及麵包類
を好まざるもの無きゆ
ゑ、汝等も、これを嗜むな



らん、是もとより、過よハ非び、其の味美うれハな
 り、余又「ジャク」といふ姪ありて、年尚稚きガ、大
 これを好み、母より錢を納うべき囊を、與へらま
 へば、其の中よハ何時も一錢の貯あることな
 し、是ハ錢だ又あれバ、糕肆又ハ麵包店ヨ行き、
 費やまが故ち、そのうハ己の貯少ト思ふ心
 より、買ひよハ物を、他人又分つことなく、人の眼
 を偷み、獨りてこれを食ふ、實又野鄙なることよ
 あらびや、汝等この際、途上より、屢提琴を弾む
 小童を見うるならん、彼の小童、一日路又泣き居



り、是ハ飢又迫れるガ
 うハ、家又歸りても、主
 人又出づんべきものな
 きを、悲みてなり、其の時
 「ジャク」の朋友等ハ、汝歌
 ちハ錢を與へんこと、こ
 れ又歌ハせ、皆錢を出さ
 して、與へたるハ、獨「ジャ
 ク」のみハ、例の如く、一錢
 をも持たざれば、何如又

ともをること能く、是に至りて始めて、自平生
食を貪りしことを悔いしより、是との性もとより、
不善なる者も非ざるゆゑ、その食を貪れるこ
との、恥づべきを知らるのみならず、小童も一錢
も與ふること、能はざりしことを、憾めるあり、他
日其の母、これを誡めて、時々糕糖類を買ふに、惡
しきことより、非ざれども、必常は些少の残をば、
残し置きて、乏しき者の施し備へよと、云ひ聞ら
せしかば、其の後ハ「ジャク」能く母の誡は遵ひて、
食を貪ることと慎めり、

忿怒

人ありて、ある家の内の騒かきを聞き、是ハ
何事ぞと、窺ひ見よバ「アルマン」と云ふ一少年の
怒まるあり、彼自遊具を毀ち、凳子を覆へし、或ハ
脚を以て榻を蹴倒し、泣き號びて、拳を揮ひ、齒を
くひしむり、顔をも眼をも赫くして、髪を亂し、
る状、惡むべくも亦怖るべし、何如とをるか、と見
居るも、其の母、徐に來り、これを慰め、抱きて鏡
の前は到り、汝が状を見よと、其の貌を照らし見
せれば、アルマンに、我をがし、其の醜きを慙ぢ、直

顔を背け、他人に見られんことを恐れたるより、
悄然として、坐を起し隅の方より退き去り、こぞ余
希とくは彼の兒の、大に自悔い悟りて、この後へ
能く過を改め、絶えて怒を發せざらば至らんこ
とと、

老婆「イェロジール」の事

「イェロジール」といへる、一老婆あり、跛よりて、行
歩不自由なるうへ、其の家もとより貧乏な
ば、寒き日も、薪を焚きて、身を煖むることも、な
り難きゆゑ、林に入りて、枯枝を拾ふ、とて老

たれば、甚困りたり、れども、その業へ、尤むる人もな
きを以て、幸なりと、日々出でて、枯枝を拾ひ居
たり、一日、少年「ポール」、其の妹「ハンリーエツト」共
林の間を遊び居たるが、彼の老婆、枯枝を束ね、
これを脊負ひて、行かんとせれども、疲き果て、
負ひかねるを見て、此の兒等、その姓善きもの
ふれ、己の遊をば止めて、直に老婆の側へ趨り
行き、余等も、その薪を脊負ふほどの力あれば、二
人して、代り見んと、云ひながら、頓て、その薪を負
ひて、「イェロジール」の家へ運びつゝ、いなり、「イ

ユロジールに、二兒の優しき心と感して、汝等能く老人を敬まひ憫みて、其の勞を助けられれば、神明争で久これ捨て給らん、他日必、大なる幸福を蒙らんと云ひいとぞ、

労働遊戯

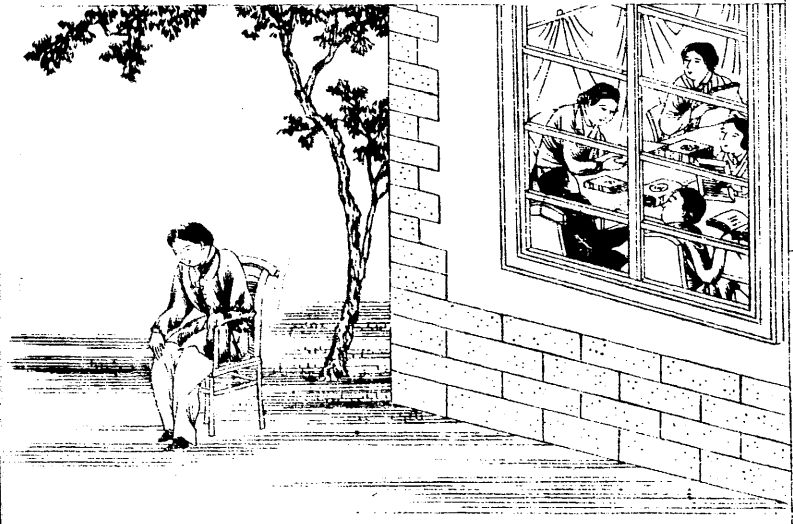
「ルウ井」と云ふ者、常々其の友と語りて、余ハ甚勤勞をすること嫌ふ、若、毎日、日曜日日曜日ハ、休業の日あり、て、學校へ行けば遊びなば、何如許う、樂しからんと云へり、その師ハ「ルウ井」の屢、かく言ふを聞き、これ又諭して、人ハ先勤めて、其の後は遊べば、樂し

亦深きものぞと云ふ、ルウ井ハ、師の教を信ぜざして、是ハ余を勤めさせんと、の心より、言ひゆるものよと思ひ、常の如く遊び居たり、一日、師「ルウ井」を呼びて、「いふや、汝ハ憐むべき者うな、も」余ガ言を信ぜば、汝自試よ、今日ハ、汝又校に上らざること許さん、終日遊びて見よと、許されば、ルウ井ハ、大に悦びて、他の兒童等の上校をる時、其の由を告げて、諸共遊べんとする、鐘聲正に授業の期を促すより、衆皆堂中に入り、ルウ井のみ留れり、是の時に至り

て「ルウ井」果して何をり爲さや、跳り走れば、須臾
まゝ疲れ、彈珠戲ハハキを爲して遊ざんとせば、伴
侶無し、此回ハ「マレ」の戲此ハ、數條の線を地上
より、隻足を以て、跳り越え、預具へ置きける、石を蹴て、これを線に達せしむる、戯をり、を試ん
と、線を地上に引きて、石を置き、獨りて、漸く跳り行
きけれども、僅に二回に至れば、これにも倦きた
り、是に於て、更に墨を把り、壁に畫きて、樂とをり
よ、其の畫ハ、家の内を榻ありて、其の前は、兒童の
群り立てる、圖にして、即ちその校堂のさまを、寫し
たる者あり、彼畫き畢り、其の圖を視て、熟意ふよ

い、繪をかきこしの樂ハ、外の遊に勝りけれども、
是ハ遊よハ非び、勤の一ツなり、是に由りて、顧みる
よ、遊戯の樂ハ、實に勤勞に如らざるものよと、始
めて悟り、遽に堂中に入りて、衆と同トく、其の業
を勤めんとするの心ハ、出て來りたれども、今さ
ら又入らんも羞らしく、鬱々として、獨りて、腰
を懸け、諸友の退くを、俟ち居たりしが、意を決し
て、午後より、必衆と與り上校せんと思へるよ、校
中の生徒ハ、皆本課を了り、相共よ、遊歩場に出で
て、遊ぶを見まは、何れも、己の勤と盡しつゝゆゑ

大に樂しきさま見えて、
跳り戯れ、笑ひ物語り、
て、遊び居たり、ルウ井も
其の中又交りて、共遊
びんと思ひたれども、今
日の勤と闘きたまへ、心
自安かゝらず、余は何とて
今朝をど、此の人々と同
しく、入校せざりけん、
快々として、樂まざりし



ダ、俄に叫びて、すべての遊ハ、樂と云ふは足らば、
余ハ決してこれを好まざんといふは、衆ハ皆否々
然らば、遊ほど樂しき者ハナシ、余等ハ、極めてこ
れを好むと云へり、既にして、午後又至れば、ルウ
井師の前又出で、固く上校を許されんことを
請ひ、心中も、も一余が課を勤むることを得ば、
是實に大幸にして、その樂、今朝、休暇を賜り、
時よりも、倍るべしと思ひ着き、遊戯ハ、以て
勞苦を慰むる所にして、その樂の多少ハ、唯勤の
浅深に關するものなり、

「アンドレ」の畜狗

少童「アンドレ」或る日、父母に從ひて、遊歩せり。途申より、惡しき小兒等相集り、小狗を河に投げ入れて殺さんとし、其の首を括り或は棍を以て、こまを打ち、或は石を擲ちて、これを苦しましむるを見て、父母もその小狗を購もんことを願ふ。父母も、善き人なれば、喜びて、小兒等を諭し、これを購ひて歸り、既にして月日の立つと隨ひ、その小狗漸長して、健ふる状、實と愛をべくして、毎又「アンドレ」は伴ひ、右に馳せ、左に跳りて

遊び戯ましが、一日「アンドレ」野に出で、向方を、池の畔に、白瑠璃艸の花の多く開き、うらを見て、何花をらんと、歩み近づき、又誤りて滑り顛び多れば、憐むべし、忽ち池の中へ陥りて、溺れんとせしを例の隨ひ來たる狗、水中に跳り入りて、小童の身は、傷つけざるやうに、その衣を啣みて、岸に極ひ上げ、夫、慈愛ハ人の知らざる所は、施しても、必その報あり、况や、その慈愛を施せる者と、伴ひたるは、於てを、

播種、及、刈收

小童「シユリアン」と云ふもの、稍長ざる及びて、父より従ひ、田野より行かんことを請ひ、共に出て、畠より抵れば、父の囊の中より、麥粒を取り出だして、これと土を投げ散らせり、シユリアン、これを見て、大に驚き、父より、何を為らるるか、余のぞの麥より手を觸して、だも、母上の叱りて、人々の勤勞をば、これを得んが爲をば、戯れも、かゝること、是より、宜しからぬ業ぞと、教へ給へり、若し父より今日の所作を、知られれば、何如許う、歎き給はん、余は、決して母上より、告げまじゆ、

りること、は、とく止め給ひてよと、云へば、父は笑ひて、汝は、何事も母に隠さば、必顯す、これを告げよとして、彌麥を投げ散らして、止まざり、これハ、シユリアンに、只驚き怪し居り、此の時に、漸寒天より向ひ、さる頃、ゆゑ、復田野より行くことも、無かりしが、春より、偶、此處より來り見れば、曩より投げ散らしたる麥、皆芽を生じて、青々として、他日又父母より伴ひて、來り見るよ、獲り入れ、近き時節なる故、其の麥皆黄ばみ熟せり、母ハ、シユリアンに語りて、汝、これを見ずや、初種を蒔きてより、漸根



を生トて又芽を出ぶ、
 月日經て、生長し、今かく
 黄バみ熟をる又至れり、
 後ハ獲りて、これを收
 め蓄ふるのいと、云ふ、
 エリアニ始めて、父の
 麥を投げ散らせり、所以
 を會得し、心の中又、此よ
 り後ハ人又對し、妄又
 諫めがまじきことをバ

言ふやドと誓ひたり、父又これヲ教へて、凡
 人ハ、苟も收め蓄へんことを、願わば、必先種を下
 さんことを、要すべしと、云ひしとぞ、

林間路を失へる兒童の事

爰又一兒あり、兄と共に、父母に從ひて、人里離れ
 たる處に住り、此の兒ハ、其の性、素より惡しき
 者、ハ非ざるが、一日何事ハ知らねども、過あ
 りければ、父ハ色を變トて、これを睨み、母も大に
 怒りて、これを叱り、兄ハ捨て、外に出で去りぬ、
 此の兒稚心、何如なれば、親も兄も、余をバかく

棄つるならんと思ひ、泣き咽びて、居よりしが、暫
ありて、思ふやう、家の内より、余を愛する者一人
も無かれ、余は、此より叱られざる、家へ往かん
と、心著きさるゝ、其の悲しき、益遣るかたなく、
泣き居れば、父へ、田を耕さんとして、出で去り、母
の食を調せんがため、厨へ入りぬ、時こそ好け
れと、竊り忍び出で、れども、さして適くべき方
もなく、又兄の目も、かくらんことも、心苦しく、何
如とせまると、思ふほど、向方、大木のあるを
見て、獨語、彼の木の陰より、其の實を食うべし、饑

を凌ぐも、足りおんと、木陰へ至りて、仰ぎ見れば、
葉のみ見て、來れるか、ひもあき、兄の來らんこ
とも、恐ろしく、けまば、徑あるか、を尋ねて、立ち去
り、此の兒、自其の罪あることを、知るが故、再
父母へ叱られんことを、畏るゝ心より、遠き路を
も、厭はしく、暗き所をも嫌はげ、日の暮るをも忘
れて、脚を任せて、歩み行きしが、遽に、晚し向ひけ
まば、何となく、心細く、その邊を見回らす、家一
軒もなく、樹木森々として、彌闇く、寒さへ、添ひ來
て、その物凄きこと、言もんらたを、是に於て、初

りて父母の懐々しき兄のその身を尋ねんことを、想ひやり、頻々家へ歸らんとせれども、その路を失ひ、東へ東へ西へ西へ躊躇ひ、行くべき方を辨べ、この時、日ハ全く暮れて、一足も進み難きゆゑ、此の兒、大に泣き號びて、父を呼び、母を慕ひ、又兄の名を呼べども、唯梢を度る、風の音と、林々嗥る、狼の聲より外へ答ふる者もあらざれば、愈恐れて、歸らんとせらるゝ、愈迷ひて、道を失ひ、とある池の邊へ出で、堤へ、荆棘生ひ茂りて、岸へ、蘆荻立ち蔽ひ、水の色さへ、見え分ら

ぬ、いつとせよと立ち留まれば、堤の陰へ小家ありて、壁の隙より、燈の影洩り出で、嬉しくも、住む人ありきと、立ち上りて、戸を叩けば、内より老翁出で來り、熟視せば、常々此の兒の家へ出入を、樵夫を、樵夫も駭きて、その故を問ひ、松火を點し、慄き居る、兒を慰めて、その家へ送り還さんと、立出で、行、これ又教へて、汝も、余が家へ來らば、憫れ、今宵一夜歸りかねて、餓も凍えもして、親兄も如何許の嘆きをかゝんも、知るべからず、余、今汝を送り往らば、汝

縦今父母は叱られ、打ち懲らさうともよからぬ心を、生むること勿れ、父母の心の、子を愛することへ、少くも、變えらざるものをなれば、叱るも、打つも、決して汝を棄つることは、あらずと云へり、

嫉妬

「エミュー」は、妬の心深し、是實も、身の不幸と謂ふべし、彼、他人の、遊具を見る毎も、これを得んと、思ふの心より、或は罵り、惑ひ、忿り、何物も、人の手も、在ることを快とせば、中にも、最「ボール」の環を持ち、「レヨン」の獨樂を持てるを妬む、又「リヌレ

ヤ」に云ふ者、學校より、褒賜を得たりと聞けば、例の妬の心より、大に泣き、「カスト」の、野遊びに行きて、無花果を獲たるを見て、これを怒り、又「ガイクトル」と「フェリック」の、兩兒を怨むこと甚し、その故を尋ねれば、小さき、輕氣球のことに、由りてなり、即ち「ガイクトル」をば、これを與へたりとて恨み、「フェリック」をば、これを貰ひたりとて、惡めるなり、かく、妬の心、甚しきゆゑ、人毎も、持てる物あれば、必分ち與ふれども、その心は、足まりとをることなし、されば、此の兒の、好む人

もまゝ、亦此の兒を好む人もなきゆゑ、その母、大
よこれを歎げ、く、噫、エミュー此、汝斯の惡習を、
改むること無く、母の一生、悲は耐へざるべし、

鳥の巢を取りし少年の事

或者の物語り、余、稚き時、二人の兄と共に、鳥の
巢を取ること好みたるが、余は、樹に登り得ざ
るゆゑ、樹の下に往きて、梢を窺ひ、其の巢あるを
見れば、兄を呼びて、取らせしむ、ある日、白頬鳥の
巢を見出たり、いづれも、その内を見ん
と思ひ、雌雄の親鳥の、飛び去るを俟ちて、兄等と

共に、これを取りて見れ
ば、二匹の雛鳥あり、余等
を見て、嘴を開き、餌を求
むる状なり、余は、丁寧と
餌を與へて、畜ひ出さば、
面白うらんと、言ふ、一
人の兄は、然らば、好き籠
を買ひて、與へんといひ、
又一人の兄は、その籠を、
日のよく中る處に置き



て、囀らせんと云へり、余ハ最嬉しくしてその巢を
手ヲ持ち立てる又、母鳥、忽餌を啣いて飛歸り、巢
を求むれども、なかりければ、傍を飛び翔りて、巢
の有處を誤れりと思ふ状して、哀げに、鳴く
こと甚し、父鳥ハ、遠くその聲を聞き、同トく、此
處よ飛び來り、雌雄共、巢の跡を飛廻りて、哀
鳴くこと、稍久し余、その時親鳥どもハ、巢を取ら
れし故、悲むならんといへば、一人の兄も、心著き
て、親鳥ハ、かくまで、雛を愛するものなりと云ふ、
又一人の兄ハ、然らば、早くこの巢を返さんと云

ひて、その巢を持ちて、立ちよれば、雌雄とも、怕
れて、何處より、飛び去りぬ、余等皆、後悔せれども、
爲んうた無く、遂、謀りし如く、巢を持ちて、家
に歸り來ると、母ハ、これを見て、さて、情け無きこ
とを、せしものなりな、汝等の遊ハ、この子、なき、惡
しき業なるぞと、誡められりしが、翌日、又至り、
餌を與へふどして、勞はれども、二匹とも、そのま
まに死失せり、實、余等が意を用ゐるハ、母鳥
の、慈心、及ばざること、遠きを知りて、兄弟共、
今より、後ハ、決して、かゝる遊ハ、せんずくと誓ひ

て、復その言又ハ負グざりーと云へり、

花、及、蝶

小童ありて、母又従ひ、郊外又遊びより、頃しも、夏の
の央をうりれども、麥も、菜の花も、皆畠又満ちて、そ
の間に、種々の花薫り、數多の蝶、戯れ遊べり、小童
ハ、麥の間に、分け行きて、花を摘まんとするを、母
ハ、留めて、是ハ、麵包を製る又、用ゐるものを、なれば、
必踐と荒らひことなかま、殊又、花ハ、莖又附ま
られ、ごとそ、美しけれ、手又取るときハ、萎むもの
ぞと、云ひたれば、教ふるよし、お、花をば摘まば、母

の側を去りて、一匹の蝶を捕へて、持ち歸り、母君
是ハ何と云ふ物ぞと、問ふ又、母ハ、汝能く考へ見
よ、それをぞ、動物と云ふ、今汝又撮まれ、翅を傷め
て、飛び得ぬハ、憫むべきことを、ぞやと、云へば、
小童聞きて、哀又思ひ、傷めし翅の、舊のまゝよ、あ
らぬを、歎き居より、兄田野ハ、皆神明の園なり、動
物も、植物も、亦神明の造りたる物を、れば、余が必
用のものハ、取りても、妨がしと雖、己一人の娛又、
神の物を、害ふハ、實又、良からぬことと、謂ふべし、

兒童神を拜受るの禮

一人の母あり、その子に教へて、今汝は、年尚稚し、
余も昔は、汝と同トく、稚かりしが、母の、誠は善き
人にて、田舎に住ゆり、或日、余田圃に出で、其處
此處と遊び歩行き、家歸りて、母の膝を枕とし、
寝ながら、母は語りて、今日の田圃は遊びて、甚樂
しかりしといへば、母は答へて、汝が樂しと思ふ、
田圃はさらなり、その處を照す、太陽又は汝が夜
見る所の、月も星も、皆神明の、造り給へる物にて、
て、稚き者も、善き母を得しむるも、亦神明の欲そ
る所なりと、教へ給へり、その後、余又母は問ひて、

かく尊き神明の徳は、報い奉らざるは、最畏し、如
何よしとて、余は謝し奉る心を、神明の聽し達す
べきし、云へば、母は教へて、人の爲は、誠を盡し、神
慮は副へて、勤勞し、何事も、神の命は、背くこと勿
きを、神明を愛し敬ふ、微とまじし、されば、常は低
聲は、仰き告げ奉りて、その仁恵を忘るゝこと無
きは、是神明は、謝する所なりと、云へり、

小學修身口授終

北爪有卿 畫

1110/1-53

小學修身口授

文部省

官版御書籍發兌

淺大神宮前

山中市兵衛

長樂橋通三丁目

稻川佐兵衛

山崎一丁目

山雲寺萬次郎

